

# 新規外来生物オオタナゴ拡散防止のための啓蒙活動

土浦の自然を守る会

萩原 富司・熊谷 正裕・奥井 登美子・諸澤 崇裕

A publication program of brochure on prevention of habitat extension  
of new exotic bitterling *Acheilognathus macropterus*.

The Society of Nature Conservation in Tsuchiura

Tomiji Hagiwara, Masahiro Kumagai, Tomiko Okui and Takahiro Morosawa

## 1. 目的

オオタナゴは2000年頃霞ヶ浦の一部で確認され、その後生息域を拡大しているが、外来生物法では「情報が不足している要注意外来生物」とされている。オオタナゴはすでに霞ヶ浦においてタナゴ類のなかでは優占種となり、日本固有種が減少するなど在来他種への影響が無視し得ない。しかし、観賞魚業者や釣り人による流域外持ち出しが後を絶たない。外来生物の拡散を防止するためには生息域が限定されている、初期コントロールが重要であり、外来生物法による指定を待っているだけでは流域外への拡散は防止できない。そこで本種の霞ヶ浦でのふるまいを明らかにし、流域外拡散を防止するためのパンフレットを作成した。

## 2. 方法と結果

霞ヶ浦に定着し生息域を拡大するオオタナゴの在来魚種への影響を定量化するため4定点におけるタナゴ類組成を調べた。利根川下流域を含めた霞ヶ浦に接続した水域におけるオオタナゴの生息状況を調べた。魚類相におけるオオタナゴの優占状況を調べた。

潮来地点はもともとアカヒレタビラが優占したが、2003年よりオオタナゴが認められるようになり2008年には100%を占めた。同様に清明川河口地点でも、2002年には在来種であるタナゴとアカヒレタビラが90%を占めたが、2004年にはオオタナゴが認められ、2008年には全個体数の70%を占めた。約5年で

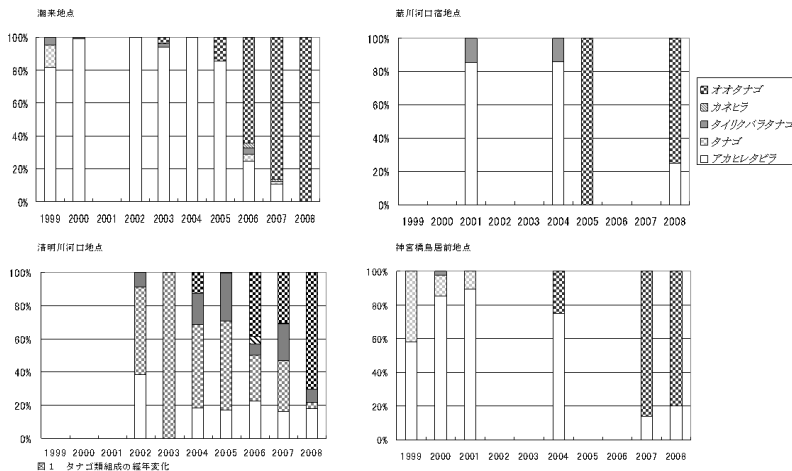


図1 タナゴ類組成の経年変化

霞ヶ浦北浦全域に生息域を拡大し、今ではタナゴ類の個体数の8割以上を占めるに至った(図1)。

霞ヶ浦下流常陸利根川と利根川に接続した印旛沼水系、手賀沼水系、牛久沼水系におけるオオタナゴの生息状況を調べた結果、利根川横利根閘門や常

陸川水門上流側、手賀沼でオオタナゴを現認した。オオタナゴはすでに霞ヶ浦水系を越えて千葉県北総地域に侵入し、さらに水路でつながっている都内中川、荒川下流部に侵入する可能性がある。



図2 作成したパンフレット